能登半島地震の経験と地域

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23894

11. 能登半島地震の経験と地域

西 本 陽 一

1. はじめに
2. 道下地区の被災と復興
3. 黒島地区の被災と復興
4. 地震の経験と地域
5. おわりに

1. はじめに

能登半島地震は、2007（平成19）年3月25日9時41分に、能登半島の輪島市沖40kmの日本海で、マグニチュード6.9の強さで発生した。最大震度は6強と大型の地震であったが、死者は1人、重傷者29人、軽傷者307人と、人的被害は比較的少なくすんだ一方で、住宅被害は全壊640、半壊1,651、一部損壊26,887と多くの世帯に被害を与えた。

今2008年度の調査対象地域である輪島市門前町は、石川県でもとくに高齢化率の高い地域である。このような地域が、被災・復興においていかなる経験をしたか、地震時と復興期において地域がどのような役割を果たしたかを、道下および黒島の事例から報告したい。

2. 道下地区の被災と復興

道下の属する諸岡地区では、居宅560のうち、全壊152（27%）、大規模半壊21（4%）、半壊125（22%）、一部損壊262（45%）、無被害11（2%）、倉庫等766のうち、全壊333（44%）、大規模半壊14（2%）、半壊123（16%）、一部損壊262（34%）、無被害34（4%）という被害状況であった（図1、図2[1]）。居宅も倉庫等も同様に被害を受けているが、倉庫等のほうがやや被害が大きかったことが分かる。

図1　諸岡の被害状況（居宅）　単位：戸

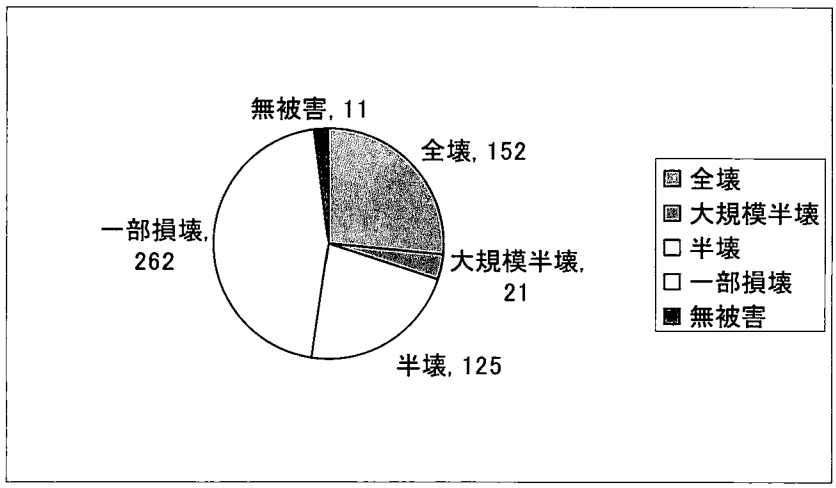
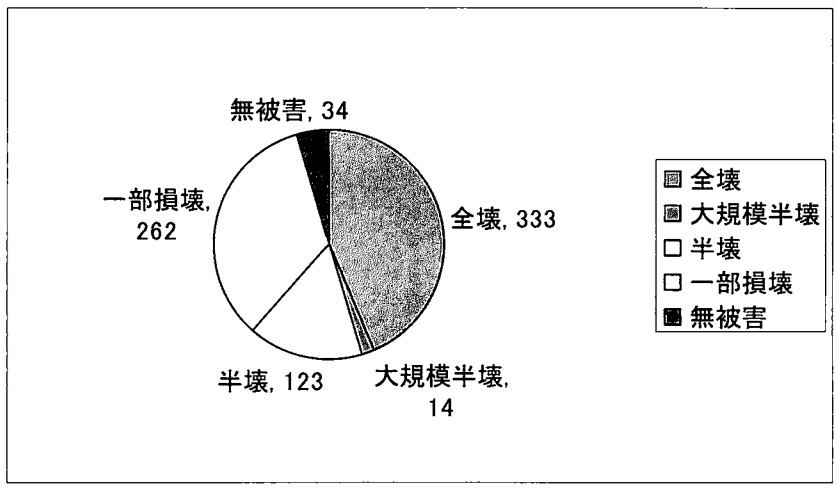


図2　諸岡の被害状況（倉庫等）　単位：戸



2.1　地震発生と被害

地震発生時に自宅にいた W さん（男性、69 歳）は、その時は、何が起こったのかわからなかったという。「まさか自分たちの住んでいるところで、こんな大きな地震が起こるとは思わなかった」と同氏が回想されているとおり、能登半島が地震に見舞われると予想していた人はほとんどいなかった。道下の区長さん（男性、75 歳）も、「阪神淡路、宮城沖、新潟県中越と大地震が数年置きに発生し、その都度防災に対する備えを心がけるよう呼びかけがありますが、他人事のよう

にしか受け止めず、関東、東海地方は怖いけど、石川は大丈夫と高を括っていました」と記されている（泉 2007: 5-6）。

地震発生時の状況は人それぞれであるが、道下区長（男性、75 歳）は、次のように体験を生々しく記されている（泉 2007: 1-2）。

> 地震が発生した時、私は裏の庭に面した縁の廊下にいました。
>
> ドーンという大音響がしたかと思うと、家中がガタガタ揺れる振動と共に激しい上下動で立っていられない状態でした。一瞬の内に戸が倒れ、壁が落ち、家具や戸棚が倒れ、家中に物が散乱していました。凄い地震だ。すぐ外に逃げなければと思いました。
>
> 98 歳になる母がいます。いつもいる居間は、テレビが台から落ち、サイドボードが倒れ足の踏み場がない有様でしたが、母は無事にこたつにチョコンと座っていました。すぐ母を背負って、外れた縁の戸から裸足のまま、裏の庭へ出ました。
>
> 外へ出て、すぐに、9：43　防災無線放送の津波警報で避難の指示があり、母を軽トラに乗せて、地区の高台にある指定避難所の「道下農村公園」へ急行しました。

地震の大きさにもかかわらず、幸いに人的被害はなかった。これについては「時期時間が幸いした」という声（男性、80 歳）があった。地震発生は 3 月の日曜日の朝であったが、暖かい日だったために、この方のお宅ではストーブを消していたという。また大蔵町の W さん（男性、69 歳）は、耐震装置つきのストーブだったので助かった、火事も「ひとつも起こらなかった」と語った。

家屋が全壊した M さん（男性、77 歳）は、寝転んでテレビを見ていたところで、家がぺちゃんこになったが、頭上 10～20 センチの差で助かり、倒壊家屋に埋まりながらも、光が差すところに向かって自力で這いでてきて助かったという。

W さん（男性、69 歳）は、地震発生時には、自宅の居間にいた。地震によって柱が傾き、山古志村のようになるかと思われたそうである[2)]。華道の先生をしている夫人（67 歳）は玄関のほうで花を活けていたが、ドーンと音がして地震が起きたという。ご夫妻の家では、玄関側の被害が大きく、二階の被害は小さかった。離れは新しかったのでびくともしなかった。蔵と納屋も無事だったけれど、壁の被害が大きかった。最近の瓦は昔のものよりも重いので、瓦を新しくしていたならば、重くて崩れていたかもしれないと語られた。棚なども全部倒れてしまい、ひどかった。夫人は、婦人会長として、震災後すぐに避難場所である公民館に向かった。

M さん（男性、69 歳）は、地震発生の時には家の中にいた。いきなり下から突くような揺れが来て、テレビが転がったり、たんすが転がったりしたので、急いでブレーカー、ガス、水道を止

めたという。

男性（76歳）は、地震発生時は、車で家を出てお寺の前を通っているところだった。同氏の家は全壊で、土蔵ふたつも崩れ、置いてあったコンバインや車もつぶれた。

何人かの住人の方の話では、道下は昔は海か河原で、地盤が弱かったために被害が大きかったということだった。震災以前の道下には、母屋、離れ、土蔵、納屋などが併設されている家が少なくなかった。母屋が壊れた人の中には、家を建て直すまでのあいだ、離れや納屋で暮らす人もいた。

2.2 道下農村公園への避難

地震発生直後の9時43分には防災無線放送で津波警報による避難指示が出された。道下の人びとは、指定避難場所であった道下農村公園に集まった。「高齢者が多い地区ですから、家族に手をひかれてくる人、老人者を押してくる人、車椅子に乗った人もあり、必死の思いで集まってくれたと思います」と道下区長が語るとおり（泉 2007: 2）、高台の避難所への集合は、とくに高齢者にとっては大変なことだった[3)]。

避難所である農村公園では、各町会長にプラカードが渡され、住民に町会ごとに集合してもらい、避難者の確認をおこなった。いずれの町内も残留者がある状態であったため、消防団員による町内見回りにあわせて、一部町会長にも見回りをしてもらい、安全確認と避難指示をしてもらった。避難せずに残っていた人びとは、防災無線放送が聞き取れず、家の片づけをしている人びとだった。民生委員はあらかじめ要介護者対象の「防災見守りマップ」を作っており、要介護者の安否確認に大いに役立った（泉 2007: 2-6）。

2.3 輪島市防災総合訓練

地震という不幸中の幸いだったのは、能登半島地震の5ヶ月前に防災訓練がおこなわれていたことである。平成18（2006）年10月22日に、道下・鹿磯・黒島の3集落を対象に、能登半島を震源地とするマグニチュード7.0の地震が発生し、津波警報が発令されるという想定のもとに、輪島市防災総合訓練が実施されていた。この訓練には、道下地区からは住民の半数以上にのぼる約350人が参加していた（泉 2007: 2）。

訓練では、津波警報発令とともに高台にある指定避難所の道下農村公園に避難し、道下集落の9つの町会の町会長がプラカードをもってそれぞれの町会住民を集め、避難者を確認して、集落に残っている人を把握して区長に報告した（泉 2007: 2-3）。住民の方々から聞かれたように、この事前の訓練のおかげで、実際の地震の際にも住民たちはいちはやく避難場所に集まることができた。たとえば、諸岡婦人会長（67歳）は、「農村公園にあつまる予備訓練がよかった」とおっしゃ

った。Tさん（80歳）は、「阪神淡路地震以来、門前町で避難訓練をしていて、それが役に立った」と語られた。自分の住む町が大地震に見舞われると考えていた人は少なかったが、実際の避難は、あらかじめ避難訓練をやっていたことで円滑に進められたのである。

一方で、津波注意報解除までの1時間30分あまりの農村公園で待機しなければならなかったことは、防災訓練でのマニュアルにないことだった。外での長時間の待機は、高齢者、病弱者、体調不良者にとってはとくにつらかった。町会長、消防団員、住人が一緒になって自発的に、テントを張り、椅子を用意したりシートを敷いたり、公民館から毛布をもってきたりして、これらの人びとを気づかった（泉 2007: 3）。

2.4 諸岡公民館への避難

11時30分には津波警報が解除され、避難者のうち主に高齢者は近くの諸岡公民館に移ることになった。元気な人や家が気になる人は家の様子を見に帰った。諸岡公民館は、約100畳の大集会室と42畳の会議室、さらに資料室や事務室、調理室、トイレを備えた木造平屋建ての建物である（泉 2007: 3）。そこでの炊き出し活動の中心となった婦人会長（67歳）の言葉通り、「公民館には、必要な道具がいろいろ揃っていた」。公民館での避難生活、特に、外からの救援がまだ殆ど届かなかった被災当日の対応については、区長、公民館長、地元の市職員中心となり、住民が自分たちで相談して進めてゆかなければならなかった（泉 2007: 3）。

早速とりかからなければならない仕事は、避難者への昼食の提供だった。昼過ぎには、婦人会長など女性を中心とした有志の意向で炊き出しを始めた。区長の判断で区費を使って米を購入し、野菜などは各家から持ち寄ったり、近在の食品スーパーから寄付されるなどで集めた。ガスコンロや炊飯器は家から持ち寄ったほか、炊事用具は公民館備え付けのものを用い、水は近くの家の井戸水やペットボトル水を利用した。前庭にテント張りの炊事場を設け、男性の応援も加わり、午後3時ごろにおにぎりとお汁を配食できた。「おいしい」「ありがとう」と大変喜ばれたという。夕方には自衛隊炊き出しのアルファー米おにぎりと即席みそ汁が災害本部から届けられ、翌日以降は被害の少なかった浦上などの隣接町村の婦人会からも炊き出しの応援があったが、自身が被災者である婦人会員による炊き出しは4日間つづけられた（泉 2007: 3-4、鏡味・溝部・西本 2008: 205）。

しかし、電気は通じていたものの、水道が壊れていた。水は給水車にたよった。水については、岐阜から来たボランティアの人の助言にしたがって、井戸、池、の水をペットボトルに入れて使ったりしたという。地震の翌日には、他所からボランティアの人びとがやってきた。地震発生はまだ寒い時期だったので、ボランティアの人びとがもってきたお湯を沸かす機器はありがたかった。断水は一週間続いた（婦人会長、67歳）。

医療については、支援の人々が「泊りがけで来てくれてよかった」（婦人会長、67歳）。被災当日の夕方には日赤救護班の保健師と介護師が到着し、体調や衛生面での指導をしてもらった。その指示のもとでノロウィルスも、患者の隔離と手洗いやうがいの励行によって、一週間で沈静化した（鏡味・溝部・西本 2008: 206）。

トイレについては、使っても、流せずに困った。トイレは外で済ますか、避難場所の簡易トイレを使った（男性、68歳）。手も洗えなかった。川から水を汲んできて、それを使った。トイレは不自由で、衛生面の問題もあった（婦人会長、67歳）。3日間ほど避難所にいた後に家に帰った男性（83歳）は、電気は来ていたが、水道と下水が復活するまでに一週間かかったので、その間トイレと食事は公民館でしていた。

地震発生当日と復興初期において、公民館の役割は大きかった。いくつかの声を拾ってみたい。

西町の男性（60歳代）は、地震発生当時には穴水にいた。奥さんは自宅にいて、出産を終えてすぐの娘さんと子供も実家である家に帰ってきていた。道下地区西町の常会長であるこの男性は、地震発生当日には、公民館で水やトイレの確認をし、炊き出しや連絡などの世話をした。当日には500人近くの人が避難していたという。

家が全壊した大蔵町のTさん（76歳）も、地震当日から一ヶ月間ほど公民館に避難し、5月10日から12月25日に家が完成するまで仮設住宅に暮らした。公民館には300人ほど避難していて、寒くて、他人に気を遣わなければならないので居づらかった。地震の翌日には、簡易トイレがたくさん揃った。水は、井戸や他の町から来た給水車があり、不自由しなかった。公民館避難中も、昼間は田んぼをしに戻っていたという。

西町のTさん夫妻（80歳代男性と75歳女性）の家では、かつて葉煙草の乾燥庫だった倉庫が倒れて、道路をふさいだ。夫妻は地震発生後の最初の一週間、公民館に避難し、その後納屋で暮らし、さらに親戚の家（道下）で暮らした。

中町のMさん（83歳）の家は、地震で全壊した。地震当日Mさんは公民館に泊まり、退院してすぐだったこともあり、その後1ヵ月ほどは岐阜県の娘さんのところで暮らした。その後、道下に帰ってくると、ライフラインも復活し、スーパーも再開していた。農協と漁業組合の保険で、家の建て直し費用のほとんどを賄うことができた。

中町のTさん（62歳）は、2007年の4月から公民館長になることになっていたので、公民館での仕事もおこなった。避難所である公民館の生活の不都合な点を改善したりといった仕事だった。公民館には300人ほど、近くの保育園にも数十人が集まってきたが、地震の揺れがおさまると、後始末のために家に帰る人たちもいた。

西町の80歳代と60歳代の女性は、それぞれ1週間と2日間、公民館で避難生活をした。80歳代女性の方は、公民館での生活は「楽しかった」と語った。その後2人は、京都の親戚の家に2

週間ほど滞在した後、崩壊を免れた離れに手を加えて住んでいる。新しく暮らしている家は、以前よりずっと部屋数が少なく、それが少し残念だという。

このように公民館での避難生活は、「楽しかった」といったものから「居づらかった」というものもあり、さまざまである。そして、公民館に長くとどまる人から数日とどまった後に、他所の親戚の家にお世話になる人など、多様に公民館が利用されていたことがわかる。

道下区長の用意された資料によると、地震当日の夜には、公民館のロビーまでを使い 247 名が宿泊し、さらに隣接する松風台保育所にも、幼児連れ世帯など 60 名が寝泊りしたという。これは地区内の約半数にのぼる人数である。その後 26 日には公民館に 186 名、保育所に 40 名の計 226 名、27 日には公民館 106 名、保育所 35 名の計 141 名と順次自宅に戻る人が増え、28～31 日は 90 名弱、4 月 1 日～6 日は 80～53 名、7 日～30 日は 40 名前後で避難者数は推移した（泉 2007: 4）。5 月 1 日には道下の海よりの空き地に仮設住宅が建てられ、公民館で寝泊りをつづけていた人びとは全員仮設住宅に移った。一ヶ月あまり続いた公民館での避難生活はこれで終わった。

2.5 婦人会の活躍

先ほど述べたとおり、被災後しばらくしてからは、自衛隊や他所から来たボランティアの人びとによって、食料の配給がおこなわれたものの、特に地震発生直後の時期において、婦人会による炊き出しは大きな役割を果たした。ここで、諸岡公民館での避難生活の中でも、地震発生直後の時期における婦人会の活動を、婦人会長（67 歳）のお話を中心にほかの住民の方がたの話を交えながら、素描してみたい。

W さん（女性、67 歳）さんは、現在（2008 年時点）道下地区の婦人会長を務めて 4 年目で、予定されている来年度も含めると、5 年間も婦人会長を連続して務める方である。婦人会長になる以前には副会長も務められていて、合わせて 12 年間の長い間、道下地区婦人会の幹部をなさっている。夫は農協勤務後、門前町の町会議員、合併後は輪島市の市会議員と、議員を長く務められた。W さん地震のお宅も、地震によって「半壊」となった。

諸岡婦人会は、会員数 268 名で、30～40 代はおらず、50、60、70 代の人びとが多く、80 代の人もいる。このうち道下の会員は 150～160 人である。諸岡地区では、婦人会と老人会の両方に入ることができる。役員は会長のほか、副会長 2 名、書記 1 名、9 つの町会に対応する常会長 9 名が置かれ、これら役員が炊き出しの音頭をとり、他の会員も合わせて 20 名くらい（50～60 歳代中心）が 4 日間公民館に泊り込んで、避難者の食事の世話に当たった。

地震発生日の昼過ぎには、婦人会から 10 人ほどの人が出て、夕方にはもっとたくさんの人が出た。このように婦人会から人びとが集まって、積極的に協力してくれたという。

最初の日の夜には、パンやジュースがたくさんやって来た。3 日目ぐらいから、役員の人に手伝

いに出てくれるように、声をかけた。若い人でずっとつづけてくれた人が5～6人いた。鹿磯、深見は別の場所だったが、炊き出しの品を分けてあげた。諸岡婦人会に入っているという理由からである。炊き出しの4日目に、区長からボランティアが入ると連絡があったが、5日目からも、他所からやって来る食事を運んであげる仕事があり、大変だった。5～6人でこれらの仕事をやった。

震災に際して、婦人会の人びとは、自分の家を省みず、公民館で寝泊りして、炊き出しをおこなった。多い時には20人もの人が働いていた。中には通ってくる人もいた。家に戻って、家の片づけをする人もいたが、泊まってがんばる人もいた。力仕事については、区長さんを中心に、男性たちが活躍した一方で、婦人会の人びとが、炊事について、泊り込んでがんばった。婦人会は、民生委員などの区の役員と協力して動いた。夜遅くまで起きていなければならなかった。住民の間からの不平不満の声も少しだったがあり、婦人会長としてたいへん苦労したという。他所からのボランティアの人が増えてくると、区長さんのほうから、もういいですよと言われてよくなったが、上述のとおり、これで仕事がなくなったわけではなかった。

電気はずっと通じていたので、婦人会のみんなで、おにぎり、汁物、漬物を持ちより、炊き出しをおこなった。畑の大根なども持ちよったりしたそうである。自衛隊から支給されたのは、おにぎりだった。炊き出しに際しては、「老人の町なので、」野菜をたっぷり使った。米は最初買ったが、あとではボランティアからもらった。店にも食べ物が売っていなくて、苦労した。5日目からはボランティアの人が公民館で炊き出しをしてくれたが、ボランティアで来たのは若い人だったので、「油っこいものが多かった」。

4日間の間に、いろいろな地区からも差し入れがあったので、みんなで相談して、混ぜて出した。皆落ち込まず、復興が早かった。道下地区は団結心があった。言うことは言うが、やる。他人に頼らないという。4日間は無我夢中だった。その後は、自分の家の片付けもし、夜には公民館に行って、手伝いをした。仮設住宅が建つまでは、公民館に避難していた。だんだんと人びとは家に帰って、最後まで公民館にいた人は少なかった。

このように、他所からの応援もまだ少ない被災直後の時期において、自らも被災者である婦人会の人びとによる献身は、大きな役割を果たしたのである。

2.6 仮設住宅

2007年5月1日には、道下の海よりの場所に仮設住宅ができて、公民館に避難していた人も全員仮設住宅に移った。家が全壊していなくても、崩れるおそれがある場合には、仮設住宅などに移り住む場合もあった。

Tさん（男性、76歳）は5月から12月の終わりに家が完成するまで仮設住宅で暮らしたが、4畳の部屋が2部屋、お風呂、トイレ、キッチンがあり、自衛隊が毎日仮設住宅でお風呂を開いて

くれたという。

K さん（男性、76 歳）は、仮設住宅で 3 ヶ月間暮らした。仮設住宅にはクーラーが付いていたが、天井が低かったという印象をもたれていた。

O さん（女性、83 歳）は、仮設住宅の部屋は 6 条だが、蒸し暑く、エアコンをつけっぱなしにしないと無理だと語った。

聞き取りをおこなった 2008 年 8 月時に仮設住宅で暮らしていた O さん（女性、83 歳）は、地震後なんどか住居を変えている。地震発生の 2 日後に滋賀県に住む長男が迎えに来てくれて、仮設住宅が完成するまでのあいだ、滋賀県で暮らした。仮設住宅が出来ると、5 月から 12 月までそこに住んだが、年の暮れに同じ長男が同居を勧めてくれたため、再び滋賀県で暮らした。しかし、友達や知り合いがいないのがさびしく、また同居生活では互いに遠慮しなければならないことも多く、さらに生まれてからずっと暮らしていた故郷道下が恋しくなったために、2007 年 3 月に再び仮設住宅に戻った。2007 年 8 月に家を再建し始め、聞き取りの時には、11 月に完成するのを待っているところであった。

自宅に戻った方から、仮設住宅の住人をうらやむ声も聞かれた。仮設住宅ができたあとには、仮設住宅に入った人のほうがよっぽど待遇がよかった。風呂もあるし、ボランティアから食事が入る。自分たちも被災者だったが、自宅に戻った人には、何もなかった。自分たちで復旧しなければならなかった。公民館を使っていたときには、公民館に避難していた人には、一日三度食事が入る。自宅の人は、4 日間経った後には、自分たちで食事の手配をしなければならなかったとある方（女性、67 歳）はおっしゃった。

2.7 復興に向けて

大きな住宅被害をこうむった道下だが、多くの方は「道下は復興が早かった」とおっしゃられた。建て直しを早く済ませた人の多くは、それまで住んでいた家と違って、コンパクトな家を再建したということである（男性、69 歳）。

住宅建て直しの際には、諸岡農協の保険「たてこう」「たてしん」（建物更正総合保険）が役に立ったという。この保険は、火災では 1000 万円、特別災害では 500 万円、家屋半壊では 250 万円の保険金がでるが、支払いが早い。道下の昔の家は田の字型のつくりで、筋交いが入っていないので崩れやすかった。震災後の家は、田の字型でなく、壁を作った。黒島と鹿磯は漁村だが、道下は農村。昔は職人の町で、大工・左官が多かった。今では職人は少なくなった。復旧の際には、大工さんや左官さんが、大活躍した。諸岡消防団が屋根にシートをかけてくれたが、消防団の人はみんな大工さんか左官さんである。10 人ぐらいはいる（男性、69 歳）。

道下地区では、かなり多くの家が「JA たてしん」に加入していたが、多くは、実際に役立つと

は思いもせず入っていた。ある住人（男性、80歳）は、諸岡JAは門前JAに合併せずにずっとがんばってきていたし、頼まれて断れずに入っていたとおっしゃった。道下の人は「JAたてしん」に入っていたために、早期復旧することができた（女性、67歳）という言葉のとおり、保険は家屋修復の重要な財源となった。

住宅復興が早かった半面で、「県は（2007年）10月になってやっと景観保存を考えて家を建てたら支援金を出すということを言ってきたが、そのとき道下の復興はかなり進んでいたので、今さら言われても遅いと文句が出た」という側面もあった。

住宅の復興が進む一方で、いまだに余震があるほか、道路に車が通ると揺れるため、心配で、情緒不安定になると述べられた方（女性、67歳）もいた。一方でこの方のご主人は、余震は何度かかったがもう慣れてしまったと語られた。

復興においては、地区の役員および組織、住民の方がたの団結のほかに、自衛隊、ボランティアなど、他所からの支援も重要だった。

> やって来た自衛隊の人びとも、公民館に泊り込んだ。（後にできた）仮設住宅があるところに、お風呂を作ってくれて、ありがたかった。ボランティアの人びとは、「皆さんやさしく、おだやかな言葉をかけてくれてありがたかった」。「皆さんの助け合い」で、「本当にありがたかった」。このように、助け合いが大切である。ひとりじゃ何も出来ない。今後どこかで地震が起きたら、手伝いに行きたい。（男性、69歳）

> 全国から一万人ほどもボランティアに来たものだから不審者の出入りを心配したが、実際は近所で見知らぬ人が入ってきたときにはすぐ分かった。というのも普段からの近所づきあいが密だったから。（Tさん、男性、62歳）

> ボランティアからの差し入れは油っこいものが多かったが、本当に助かった。いちばんありがたい。（Wさん、女性、69歳）

> 地震のあとには、マスコミの人たちがやって来て、同じことばかり聞くので、ややトラブルになった。しかし、震災が新聞に出て、東京の知人が自分たちが無事でいることを知ったので、それはよかった。うるさいくらいにマスコミが聞いてきた。とにかくたくさんマスコミがいた。マスコミの人たちは、車の中で寝泊りしていた。（女性、67歳）

こうした声の中で、道下の復興は進んでいる。

3. 黒島地区の被災と復興

黒島では、居宅286のうち全壊35（12%）、大規模半壊5（2%）、半壊58（20%）、一部損壊187（66%）、無被害1（0%）で、倉庫等268のうち全壊110（42%）、大規模半壊3（1%）、半壊44（16%）、一部損壊99（37%）、無被害12（4%）であった（図3、図4）。一見して、居宅よりも倉庫等のほうが大きな被害を受けていることが分かる。

図3　黒島の被害状況（居宅）　単位：戸

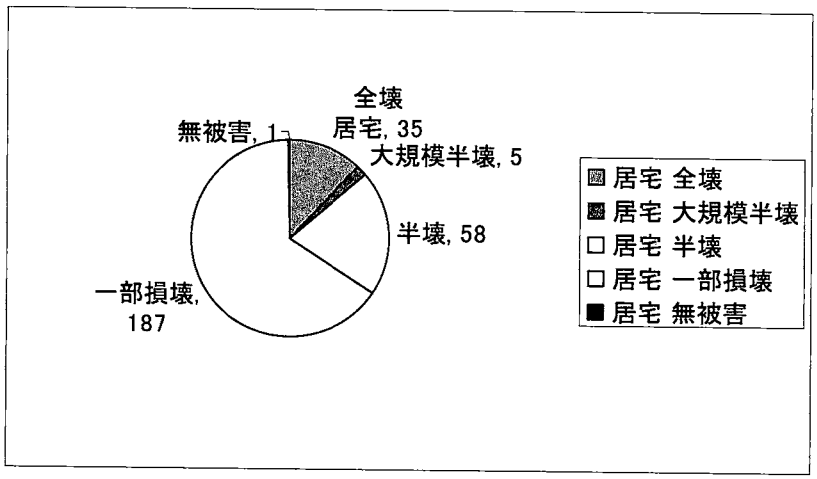
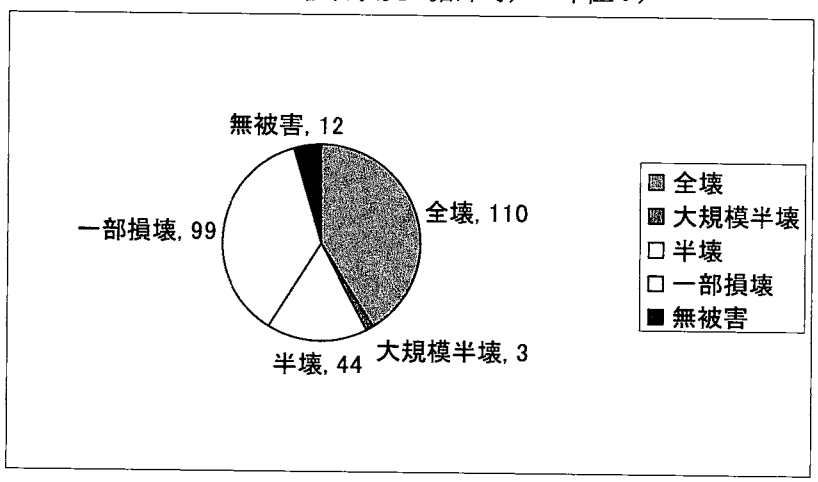


図4　黒島の被害状況（倉庫等）　単位：戸



3.1 被災とその後

つづいて黒島の区長さんへの聞き取りを中心に、黒島での被災とその後の生活について概略を記したい。その後に、住民の方々の声をひろって、被災の体験について報告する。

黒島の地震被害は大きかった。全壊と大規模半壊の家があわせて40件ほどあった。しかし、物的被害は大きかったが、人的な被害（死亡者、けが人）はなかった。ただ、小学校に上がる前の子供がひとり、ストーブの上に乗せられていたやかんで火傷をしたのみだった。

地震により、もとの二階建て住宅を、平屋に改築した家もある。昔の廻船問屋だった、県指定有形文化財の「角海家」も地震で家が傾いたままだ。現在は、地鎮祭も済んでいるが、建築会社の順番待ちで、工事自体は順番待ちの状態がつづいている家もある。屋根にまだブルーシートがかかっている家もあり、修理が遅れている。蔵も、地区全体で40くらいがつぶれた。特に空き家だった家はなかなか修理してくれない。金沢などに働きに出ているために、地域には空き家も多く、特に空き家は地震復興が進んでいない。

仮設住宅には11家族が入り、その後家を建てて5軒が戻った。その他に家の修理をするために、再び仮設住宅に戻っている世帯が3〜4軒あるので、現在（2008年8月時点）も仮設住宅には8家族が暮らしている。

地震後に金沢などに移住した人もいて、それらの人びとは、元の家をつぶして更地にしている。子供のところに移り住んだ人が少なくとも5人いるが、独居老人だった人たちだ。黒島の高齢化率は激しく、65歳以上人口が60%以上を占める。震災前は220戸、440人ほどいた人口は、震災後に200戸、410人ほどになった。

地震後に、家が壊れたこともあり、特養ホームに行く人もいた。赤神の行政運営のもの（「社会福祉法人門前町福祉会特別養護老人ホームあかがみ」、輪島市門前町赤神）や民間の「ゆきわりそう」（「特別養護老人ホームゆきわりそう」、輪島市門前町深田）に、10人ほどの高齢者が震災後に移り住み、元の家はつぶしてしまったり、そのままだったりとさまざまだ。老人ホームに移った人は住民票を移した人もいるし、移していない人もいる。

黒島には「町並み保存」活動がある。推測だが、前文化庁長官の河合隼雄氏が輪島市に来たときに、黒島も見ていったが、そのときに黒島を文化的建築物保存地域にしてはどうかと言ったのではないか。また、「町並み保存」活動をすれば、地震復興のために有利だという事情も同時に働いているかもしれない。

もともと公民館と高台にある寺が、震災時の避難場所になっていた。しかし、寺は地震の被害を大きく受けた。一方で、津波が発生しなかったので、海抜がより低い公民館が避難場所として役に立った。まず住民400名ほどが公民館に避難し、津波警報が解除されてすぐあとに、100名ほどが帰宅した。5日目には、公民館には180名ほどがいぜん避難していた。公民館は12日間避難

所として利用され、最後には40〜50名ほどが滞在していた。仮設住宅ができた際には、11家族がそこに入った。震災後に、他所にいる子供のところに移り住んだ人もいたが、あとで黒島の自分の家に帰ってくる人もいた。古い家の大半には離れがあったため、震災後に工夫して離れに住んでいた人もいた。前年10月に防災訓練をおこなっていたので、震災時の対応もうまくいった。

最初の晩は、電気もトイレも使うことができなかった。公民館に移動用トイレがふたつあり、震災初日にはそれらを利用した。2日目からは、輪島市の手配で、簡易トイレが運び込まれ、その2日後には、さらにふたつが追加された。しかし、高齢者たちは簡易トイレに慣れなかった。4日ぐらいは辛抱して簡易トイレをつかったが、その後に室内トイレが8つ設置され、非常に評判がよかった。

上水道は震災後5日目くらいに一部復旧したが、下水道は遅くて、8日目くらいに復旧した。

食事は、最初の5日間は公民館で炊き出しをした。黒島は海員経験者が多い地区なので、元海員たち5〜6人に調理方をしてもらい、ご飯を作ってもらった。自衛隊からも、おにぎりと汁物が配給され、そのうちに輪島市からも支給があった。

飲料水は自衛隊の給水車で運ばれてきた。震災後5日目には、水道の一部が復旧した。

ノロウィルス感染の疑いのある高齢者もいた。彼らは、車で病院に運んで、あるいは医療班の巡回のときに検査してもらった。福井大学からの医療班が、3日目くらいから巡回・常駐していた。3〜4日で次のチームと交代し、道下などの他地域に向かった。避難所では、肺炎とノロウィルスなどは早めに処置したので、広がることはなかった。震災後の今も、金沢大学から2ヶ月に一回、健康チェックや心のケアに人が来ている。

輪島市の門前総合支所（門前町）には、支援室が設けられた。区長、公民館長、主事が、12日間ずっと泊まりで、公民館に収容された人びとの世話をした。弁当の手配、病人の世話、家や蔵での片付け作業などの仕事である。

公民館での避難生活は、「ここで育って（地域内の家に）嫁に行って･･･という人も多いから、和気藹々とすごした」。しかし、「普段はひとりで気ままにやっていた老人が多かったから、楽しく過ごしていたとはいえ、気詰まりもあった」のだろう、風邪や腹痛を訴える人も少なくなかった。

集落内での婚姻関係も多く、人同士の関係も「濃い」ので、安全確認も迅速に出来た。どの活動においても、黒島は「一村一旗」なので、指示が伝わりやすい。

3.2 被災の体験

黒島地区にいて家屋全壊の被害にあった夫妻（夫が81歳で妻が75歳）は、次のように話してくれた。

地震で、家の柱が全て折れた（全壊）。家は、半分はつぶれていたのを起こし、半分は壊れていたので、作り直した。

震災当日は、9時42分ごろに夫人は一階の八畳間にいた。夫人は今のこたつに入った瞬間だった。夫のほうは風呂場で灯油を入れていた。夫人の声を聞いて、風呂場から台所に入ったときに、風呂場のガラス戸がねじれて倒れた。危機一髪だった。初めは地鳴りとともに、ドーンと来た。海のほうに引っ張られた。ガラス戸がねじれて割れた。ガラスが砕けて粉々になって歩けないので、長靴で歩いた。食器棚は揺れの向きの関係で大丈夫だった。蔵の中の古い家具は倒れていたが、塗り物は大丈夫だった。

地震が発生した時刻は、時間的には幸運だった。日曜日だったし、朝食が終わり片付けも終わったときで、火を使っていなかったから。初めての地震で、能登に地震があるとは思わなかった。ドーンと来たけど、地震ではなく、爆発かと思った。東海かどこかの地震かと思った。

何時間かあとに電気は来た。初めは背戸のほうに逃げたら、みんな外に出ていて、心配して声をかけてくれた。それから避難所に行った。高台にある寺が避難所だった。通帳などをかき集め、食べ物をもって、リュックサックを担いで行こうとしたら、行くなといわれた。お寺がつぶれたのだった。お宮の鳥居も倒れ、大根を切ったようだった（倒れて割れてしまった鳥居が、大根を切ったような形に見えた）。

公民館に行けと言われた。南町の小学校跡に行こうとした[4]。全員公民館に行って、人数を調べた。11時ごろだったと思う。余震があり、歩けなかった。昼ごろ、津波の心配もないし、家に帰れる人は帰ってよいと言われて、帰った。町内から乾パンをもらって、家に戻った。家には、黄色のテープが張られ、赤紙が貼られていた。20年前に立てた二間の書斎が無事だったので、3月から12月までそこに住んだ。仮設住宅には行かずに済んだ。納屋のものは全て、ボランティアの人に捨ててもらい、台所を食堂にした。飲料水は、その日の晩か、翌朝に自衛隊からもらった。

北町は震源地で大変だった。土台に亀裂が入った。新しく土台を作って、砂利を入れ、鉄筋を格子状に入れ、「コンクリ」を入れ、建て直しに大金がかかった。保険と「全壊のお金」をもらった。「保険」とは農協の建物共済と県民共済で、「全壊のお金」とは復興支援だ。

新しく建てる家は、（2008年の）9月10日に棟上げした。頼んだのは黒島の大工で、おじいちゃんの代からの付き合いで、すぐにやってきてくれた。しかし、門前の材木屋は全てつぶれていたので、材木が乾くのを待ち4月になり、9月10日に建前（棟上式）をして、12月29日に工事に入った。「うちは早いほう」。地元の大工さんは少なかった。地元には一人しかいなかった。他は、七尾や七浦から来た。

水道は一週間だめだった。ポリタンクをもらい、給水を受けた。飲食用はよかったが、洗濯、風呂が大変だった。トイレに困り、ちょっとノイローゼみたいになった。自衛隊が給水車で公民

館に来たので、車で水をもらいに行った。他の人たちは一輪車などを使っていた。

家のトイレは壊れなかったが、水が流れず困った。18 リットル入れても、ひとりで終わり。そのうち本管が詰まって、水を流すなと言われて、使えなくなった。後で、ポータブルトイレを買って、それは助かった。その前は、夜に赤神の道の駅のトイレに行ったりした。

その後（7～8 日後）、自衛隊のお風呂に入れるようになった。仮設住宅が建つ前のことだ。自衛隊のお風呂は 2 ヶ月ほど使った。一度に 10～20 人入れた。

プロパンガスは、固定しないと使えない。2 週間ぐらい、カセットコンロを使っていた。公民館にも、食事をもらいに行った。買い物ができなかったからだ。

電気は、その日のうちに、何時間かあとにはついた。

次男が九州から、高校生の息子を連れてやってきて、一週間手伝ってくれた。長男は金沢から来たが、県立博物館勤めの彼は、（自分の実家の世話よりも）他人の文化財ばかり見ていた。

3.3 地区組織やボランティアの働き

震災時の黒島については、消防団などの地区の組織のほかに、海員・元海員の夫人組織である「海友婦人会」も活躍した。また、他の地区からはたくさんのボランティアがかけつけ、支援物資も届けられた。

黒島海友婦人会には、地区から手伝いを何人出してくれという「割り当て」があり、ボランティアで公民館に朝 6 時から行き、避難している人のお世話をした。自衛隊からの食料があったので、それを温めたり、配ったりする仕事だった。会長ほか 3 人ほどで、一週間ほどお手伝いをした。黒島海友婦人会は、地区組織ではないが、「その他の各種団体」として、（祭りなど）何かあるときには、手伝いを何名出してくれと、地区のほうから依頼が来る（T さん、女性、76 歳）。

N さん（男性、65 歳）は、消防団長として、地震が起きてから 20 日間ほどボランティア活動をした。まず、住民を公民館に避難させた。黒島の家はほとんど棟瓦が落ちてしまったので、ブルーシートを掛けて回った。屋根に若い団員を登らせて、下から指示を出した。粗大ごみの回収も、消防団がおこなった。輪島から分団ふたつが、ブルーシート掛けの応援に来てくれた。

若い消防団員の K さん（男性、32 歳）は、2 日間は団員として防火水槽からトイレの水を確保したりし、その後 2 週間くらいは屋根のブルーシートを掛けたり、崩れたブロック塀の片付けなどを、ボランティアの人たちと一緒にした。

ボランティアの人たちは、土蔵が壊れて、荷物を納屋に移さなければならない時、全部運んでくれた。土壁、土ぼこりの後始末もしてくれた。水、カップめん、缶詰を送ってくれたのが非常に助かった。ボランティアの方々にとても感謝している（T さん、女性、76 歳）。

3.4 震災がもたらしたもの

地震は不幸なことだが、「地震後も、（黒島周辺に）死者はおらず、火事もなかったので、みんなの心はだいぶ明るい」（N さん、女性、66 歳）という側面もあった。また、被災の経験は、地区や親戚の絆や、ボランティアなど見知らぬ人からの親切を確認することができたという意味で、不幸の中にも、より積極的な意味もあった。

地震があったとき、夫はじんのび文化村でグランドゴルフをしていた。帰宅すると台所は無事だったので、夫と共に一ヶ月ほど台所で寝起きした。水、電気、ガスは大丈夫だったが、時々断水があったのには困った。弟や娘さんが水や食べ物を送ってくれたので、近所の人と分け合った。ご近所さんからのおすそ分けもあった。避難所の公民館に行かなかったのは、家から遠かったのに加え、病気の夫が公衆の面前に立つのを嫌ったこともある（Y さん、女性、72 歳）。

地震後は、不安で眠れなかった。いつでも逃げられるように、常時普段着でいた。お互いに日頃から声を掛け合っていたので、行方不明になる人もいなかった。防災訓練がとても役に立った。余震が怖いということを、経験して初めて分かった（T さん、女性、76 歳）。

三ヶ寺のひとつの寺の寺房（女性の寺主、75 歳）は、地震被害にかかわらず、震災経験を前向きにとらえていた。

寺の被害はひどく、「つぶすより仕方ない」と言われた。（2008 年）2 月に、寺横の自宅を再建し、寺は9 月にようやく再建した。震災後は、寺の本堂に住み、仮設住宅にいて、（2008 年）2 月に自宅に戻ってきた。仮設住宅は、風呂もエアコンもあり、2 間あり、よかった。

古い寺の独特のつくりのために、修復は大変だった。もともと石の土台の上に、柱が直接乗っていただけだったから。修復では、家を持ち上げて、新たに土台コンクリを入れ、はすかいをいれて、土台を作り直さねばならなかった。これらに半年かかった。「床づか」という、床を支える金具を使った。地震専門の復興会社がやってくれた。JA の保険には入っておらず、お寺の保険が少しあって、それを使った。

水道ははじめ出なかった。トイレも使えなかった。東京の長男が来て、富来の「渤海」（「シーサイドヴィラ渤海」というリゾート）に泊まったりした。日中は寺にいた。自分の家が「一部損壊」とされて不満の女性がやってきて、文句を言ったりした（「一部損壊」「半壊」「全壊」ではもらえるお金が違うため）。その後、仮設住宅が出来たので、そこに移った。

地震によって、いろんな人と知り合える。神戸や東京からのボランティアの人や、大工さんとか。それが「楽しい」。「地震はいろんなものをもってきてくれた」。

4. 聞き取りからわかること

道下と黒島は、石川県の中でも特に高齢化率の高い地域であり、地震により大きな被害を受けた。しかし、物的損害の大きさに比べて、人的損害が最小限にくいとめられたことは幸いだった。そこには、地域外からの人びとによる手助けのほかに、特に地震時と直後に、地域が結束して行動していたことが理由として挙げられるだろう。

被災前には、ちょうどその 5 ヶ月前に、輪島市総合防災訓練が実施されていた。道下も黒島の人も、地震を予想していた人はいなかったと言ってよいほどだったが、地震発生直後には、防災訓練をおこなっていたことで、比較的スムースに非難することができた。さらに、地震後の住民の安全確認においては、要介護者見守りマップおよび、地域の人びとが日頃から近所の住人に気を配っていたことが、とても役に立った。

地域の中心である公民館は、震災直後の避難場所となった。そこでは、地域組織やその他の団体が、避難住民の世話に当たった。公民館はまた、地区内の情報収集の拠点、被災に対処する作戦本部的拠点、さらに外部との連絡拠点としても活躍した。

実際の避難の際には、町会、消防団、婦人会などの地区組織が、町会長や婦人会長といった人びとのリーダーシップのもとで、大きな役割をもった。このような公的組織の働きとともに、親戚関係も多い地域の結束、近所づきあいの緊密さ、高齢者などへの日頃からの配慮は、被災後の助け合いに大きな力を発揮したといえる。

このような地域と地域の人びとのもつ力の大切さは、道下・黒島どちらの区長さんも強調されているところであるが、それに加えて自衛隊や日赤などの救護班、遠くから駆けつけてくれた多くのボランティアの方々の助力は、避難生活や復旧の過程に大きな力となった。震災は不幸な出来事で、地域の人びとの大きな損害をもたらしたが、住人の何人かの方が強調されていたように、別の面から見れば、被災によって、地域、親戚、近所の人びと、友人知人、さらにはボランティアや行政など、遠くの人びととのきずなが確かめられ、または新しく生まれた。このことは、不幸の中でも、温かい経験だったといえるだろう。

5. おわりに

震災後の復旧がまだ終わらない中で、忙しい時間を割いて私たちの聞き取りにご協力いただい

た方々に感謝を申し上げたい。せっかく多くのことをお話いただいたのに、報告には、お話いただいたことの何分の一も生かすことができていないと感じている。つたない報告となってしまったが、必ずしも楽しいものとは言えない経験をわざわざ語ってくださった住民の方々に深く感謝したい。そして、早い復興をお祈りしたい。

注

1) 以下の図1～4の数字は、道下区長提供の資料中の「能登半島地震り災証明書現地状況表（9月28日現在）計による。平成19（2007）年9月28日現在の数字と考えられる。

2) 山古志村は、2004年10月23日に発生した新潟県中越地震により甚大な被害を受けた場所である。

3) 道下地区の年代別人口構成については、第1章を参照のこと。輪島市と合併した旧門前町で言えば、高齢者率は47.1%で、旧輪島市の31.4%を大きく上回っている。

4) 黒島地区は、ふたつの部分に分かれていて、それぞれ北町（あるいは「キタデ」）南町（あるいは「ミナミデ」）と呼ばれている。また、小学校あとの敷地を前にして公民館がある。